# 目　次

ファイナルファンタジーV　第二部

## 暁の戦士


序　章　ツェルラー …… 8

第一章　牙城――囚(とら)われ―― …… 12

第二章　グロシアーナ …… 34

第三章　追憶の男 …… 58

第四章　白い手 …… 100

第五章　大森林の伝説 …… 130

第六章　牙城――仇敵(きゅうてき)―― …… 152

終　章　巫女のみた光 …… 168

あとがき …… 170

１９９２年発売のスーパーファミコン版ファイナルファンタジーＶ及び１９９６年春に入手できた情報を基にして作品の設定を組んでおります。
そのために、現在公式発表されているキャラクター名と相違などが一部ございますので、あらかじめご了承下さい。

２０１１年 2月　森宮・記

ファイナルファンタジーV　第二部

# 暁の戦士

# 序章　ツェルラー

潮の香りと共に、波の音が聞こえる。
静かに、よせては返す。
幾度も幾度も、止むことなく。
肌に、砂の混ざった芝の感触。
……ああ……海の近く、か……。
混濁した意識。バッツはゆっくりと瞼を開く。
仰向けに倒れていた彼が見たのは、どんよりとした鉛色の空。
ここは…どこだ？
柔らかに吹く潮風。
風――？
それを感じたのは、何カ月ぶりだろう。
クリスタルを失った俺達の世界、…じゃない？
思った瞬間、バッツは我に返った。
そうだ。
俺達はあの光の渦に入って、空の遠くへ昇っていく感じがして、
……それから……!?
それから、記憶がぷつりと途絶えている。
はっと身を起こせば、すぐ近くに人の気配。
……ファリスとレナが彼の横で倒れていた。
バッツは手を伸ばして二人を揺さぶり起こす。
「おい、しっかりしろ。大丈夫か!?」
ややあって姉妹は目を覚ました。だが、二人とも目の焦点があっていない。
「あ…バッツ…？」
ぼんやりとした瞳で彼の姿を捉えたレナが、虚ろな声で呟く。
うつ伏せに倒れていたファリスが、猫科の動物のような伸びをして顔を上げる。
「……潮風だ…」
少し先に砂浜が見え、その向こうに、たゆたう紺碧の海。
「……風と水の精霊達の気配…強く感じるわ。
バッツ、ここは……」
「ああ、ガラフ達の世界ツェルラーだ、…と思う。別の世界に飛ばされてなきゃいいけど」
レナは上半身を起こして、だがすぐに目を掌で覆った。
「レナ？」
「大丈夫。ちょっと、眩暈がしただけだから…」
ファリスは座り込んだまま、疲れた表情をしながらも、レナの様子を気遣うように見ていた。
次元移動、というものは、身体的に相当な負担がかかるものなのだろうか？
だとしたら、あのクルルという少女の、太陽を飲み込んだと

まで思える元気さは一体なんだったのだ。
ロンカ遺跡の空中都市に突然現われた彼女は、次元移動してきた直後であろうはずなのに、さながら元気が服を着て歩いているように見えた。
――もしかして。とバッツは考える。
あの隕石は次元移動に伴う負担を減少するものではないか？
……まあ、ガラフに訊けば解かることだな。
憶測はあくまで憶測でしかなく、今現在の事実は、バッツも全身にだるさを感じている、ということだ。
「……これじゃ動けねぇな……」
バッツは荷袋の中から瓶入りの回復薬を取り出して二人に渡し、自分もそれを飲み干した。
どろりとした甘苦い液体。
味は褒められたものではないが、何もしないより短い時間で動き回れるようになるだろう。
――しばらく休んでどうにか体力を取り戻した三人は、周辺の探索を始めた。
バッツ達にとっては未知なる大地。
ともかくツェルラー――だと思われる――の住人を捜して、ここがこの世界のどこに位置するのかを確認する必要がある。
早く、ガラフ達と合流しなければ……。
だが焦る思いとは反して、海の近くにも、小さな森の中にも、誰かが住んでいる気配はない。
いつもなら心地よく感じる潮風が、……鬱陶しい……。
――夕日が西の海に姿を隠そうとする頃。
最初に倒れていた場所に戻ったバッツ達は、絶望的な断定を下すしかなかった。
「ここは……無人島、だな」
盛大な溜息をつきながら、姉妹が頷いた。
「北と西、それから南西に陸地が見えたんだけど…かなり距離がある。……選択肢は二つ」
続きをファリスが引き継いだ。
「どっかの船がこの島の近くを通るのを待つか、いかだを作って自力で脱出するか、だな。
……けど前者はこの辺りの海域に船が通るという保証はない、えらく効率の悪い賭。後者はひたすら危険が大き過ぎる。
どっちを選んでも、結局は運次第だ」
「私は後者を選ぶわ」
レナが即答した。
「通るかどうかさえ判らない船を待つより、少しでも動いたほうがいいような気がするの」
ファリスが唇に笑みを刻む。
「同感。…血は、争えないな」
バッツは、レナとファリスの勘に賭けてみることにした。

いや、賭けるというより、同じ思いだった。
危険は承知の上。動かなければ、きっと何も始まらない。
「俺も賛成。木はあるし、縄はツタを縒りあわせればどうにかなる。……とりあえず今日はもう休もう。動くにしても、まずは充分な休息を取ってからだ」
意見が一致したところで、彼らは薪になりそうな小枝を集め、野営の準備を始めた。

焚火を囲みながら、睡眠は交代でとることにした。
横になって間もなく、バッツはとろとろ微睡み始める。
夢と現の間。
幸せ、と思うときの一つ。
そんな彼の耳に、姉妹の会話が流れてゆく。
「……レナ…。ずっと気になっている事があるんだ……」
「なに？」
「フェール山での事だけど、何であんな…自分が傷ついてまで、ユグシールを助けたんだ？」
「……。姉様…お母様の事って、覚えてる？」
何か辛いものを秘めた、レナの声音。
「…ああ。何かの病を患っていて、ずっとベッドから動けなかったよな……」
「私ね、ユグシールを見ていると、お母様の事を思い出すの…」
「どういうこと？」
と、その時。
突然、焚火が消えた。
それと同時に感じた、何者かの気配――複数だ。
殺気はない。
しかし、ここは無人島。それに。
……この気配、人間のものじゃないな。
どこからともなく漂ってくる、甘ったるい匂い。
レナとファリスが息を殺し、神経を張りつめる。
バッツもさっと起き上がり、いつでも剣を抜けるよう柄に手をかける。
緊迫した空気。
対照的に流れる、異様に甘い香り。
次第に、頭の奥がぼうっとしてきた。
……だめだ。しっかりしろ！
自分で自分を叱咤しても、意識は香りに侵食されてゆく。
――記憶が……途切れてゆく……――。

†

「――――っ!?」
何の前触れもなくクルルが顔を上げた。
「どうした、クルル？」

「……嫌な予感がする…。何だろう…これ」
クルルはガラフの服の袖を強く摑んだ。
「おじいちゃん！　あのお兄ちゃん達、ツェルラーへは来れないはずだよね!?」
「ああ、……いや待て、たったひとつだけ方法がある。
わしがアストネアに忘れてきてしまったアダマンタイトで隕石の動力盤を回復させれば、指標があらぬからどこへ着くかは判らんが、何とかこちらの世界へ渡れる。
――クルル、まさか…！」
「たぶん、そう、だと思う」
バッツ、レナ、ファリス……まさかツェルラーに来ているのか……!?
だとしたら、あまりにも無謀な行為だ。
そこにクルルの予感を重ね合わせれば、三人がツェルラーへ来て、しかも大きな危険に晒されている可能性が高い。
だが、三人がどこに居るのかすら判らない現状では、どうすることもできない。
ガラフは拳を握り固め、空を仰ぐ。
今はただ、彼らの無事を祈るしかなかった……。

# 第一章　牙城――囚われ――

鼻についた、かび臭いにおい。
固く冷たい床。
バッツが意識を取り戻したときに感じたのは、その二つ。
顔を上げると、棘つきの、頑丈そうな鉄格子が見えた。
……これって、やっぱ牢屋だよな……。
これで生まれてから投獄されたのは四度目……などと思わず悠長に考えてしまった。
「バッツ、大丈夫？」
既に目を覚ましていたレナが声をかけてくる。
「ああ、なんとかな」
「…お約束だけど、剣は取り上げられちまってるぜ」
ファリスがいまいましげに舌打ちする。
――異世界で自分達を投獄する者…と云えば、思いつくのはただひとり。
「ファファファ…ようこそ、我が城へ！」
暗黒魔道士エクスデス――！
「ようこそツェルラーへ。いかがかな、ここの居心地は？」
まるで客を居間に通したような物言い。
バッツは姉妹を背に庇い、鉄格子に近づいた。
無意味だと知りつつも、皮肉めいた口調で毒づく。
「――これで茶と菓子が出れば文句はねぇよ。おまえの姿が見えなければの話だが、な！」
「籠の中の鳥、という言葉を知らぬのか？」
軽くあしらうエクスデス。
その時、エクスデス配下の魔物が駆けてきた。
「エクスデス様！　ガラフ達が、ビッグブリッジ東端まで到達しています！」
「ふむ…思ったより早かったな。……まあよい。大鏡を用意せい！」
「はっ！」
魔物は一度下がって間もなく、表面を水のごとく磨き上げた、直径三ナームはあろうかという巨大な鏡を持ってきた。
レナが、鏡が魔力を宿していることに気づく。
「――！　その鏡は…まさか!?」
顔面を覆い隠す青い兜の奥で、エクスデスが嗤う。
「ファファっ……おまえ達に役に立ってもらうとしよう」
牢の中の三人の姿が、鏡に映された。
その表面が、ぬめるように鈍く光る――。

†

ビッグブリッジ東端。

バル国の戦隊が、魔物達と戦っていた。
魔力によって人間に近い姿に進化した半魚人、有翼猫と同種でさらに凶暴化したフライングキラー、魔力を宿した鎧が車輪をつけて小さな戦車となったプチチャリオット――。
ガラフが最前線で刃を振るい、そのやや後方にてクルルが、電撃魔法中で最も威力のあるサンダガを連発する。
兵士達も引けをとってはいなかった。
剣を薙ぎ、矢を射り、槍を突き、空中の魔物に大砲を見舞う。
バル国の総力をあげた攻防。
戦況は優勢に立っていた。
――と。
唐突に、魔物達の攻撃が止む。
そして魔物は次々と、文字通り忽然と姿を消してしまった。
「何だ？」
ざわめく兵士に士官達の声が飛ぶ。
「武器を納めるな！　油断するでないぞ！」
誰もが訝しげに様子を窺う。
「おじいちゃん、見て！」
クルルが叫び、東の空を指さした。
そこに映し出された、一人の青年と二人の若い女の姿。
彼らの前には頑丈そうな鉄格子。
ガラフは瞠目した。
「バッツ、レナ、ファリス…!!」
――やはり、こちらの世界へ来ておったのか！
重なるように哄笑混じりの声。その声は。
〈ガラフよ退け！　退かぬなら、この者どもの命はない！〉
ガラフは、ぎり、と歯をきしらせ、
「エクスデスめ…！」
……よりにもよって、奴の手に落ちていたとは……!!
「…全軍、退却！」
悔しさに満ちたガラフの命令が、バル軍全体にゆき渡る。

†

「投影鏡…映したものを別の鏡や空間に投影する魔鏡ね」
レナはエクスデスを睨みつける。
「お父様やガルラ、ミューレン様、兵士を操り、クリスタルを破壊して私達の世界を滅亡の危機に晒しただけでなく、こんな下劣な手段に出るなんて……許せないわ！」
「下劣？　どうやらレナ姫は、ご自分の置かれた立場をご理解しておられぬようだな」
悪びれもせずエクスデスは言いのけた。
「……っ…」
言葉に詰まるレナ。
ファリスが静かな、だが怒りを含んだ声音で言い放つ。
「人質、虜囚……そういったところか。今の俺達の利用方法と

しては効果的だな」
「その通り。……だが安心するがいい。すぐに殺したりはせぬ。おまえ達には、まだまだ利用価値があるのでな」
ふっ、と兜の中で薄笑いを浮かべるエクスデス。
利用価値、だと!? 人を物みたいに思いやがって！
バッツはエクスデスを殴り倒したい衝動に駆られ、拳を握り固めた。
けれど今は『籠の中の鳥』。奴を痛めつけることなど叶わない。
「この、――――っ！」
もどかしさのあまり、アストネアで最も汚い言葉が口をついて出た。
罵倒、したのだ。が、次の瞬間。
いささかムッときたのか、エクスデスは手に黒とも濃紫とも つかぬ光を生み出し、バッツめがけて投げつけた。
ばんッ！
エクスデスの放った光はバッツの腹に命中し、バッツはその勢いで後ろの壁に叩きつけられる。
「…っ！」
腹の底から、込み上げてくるものがあった。
口の中に広がる鉄の味。
「……ぐふっ……」
堪え切れない吐き気と共に唇から溢れ出した、深紅――血。
「バッツ!!」
レナの悲鳴が遠く聞こえる。
レナとファリスがバッツに駆け寄る。
「大丈夫か!? …出血がひどいな……」
バッツは手の甲で血を拭う。
急いで回復呪文を唱えたレナに、笑ってみせた。
けれどきっと、弱々しい笑みにしか見えなかっただろう。
「……これくらい、大したことねぇよ」
強がりと思われるのは解かっている。
それでも、この二人に心配をかけたくなかった。
バッツの手当てを終えたレナが、何か思いつめたように唇を噛んだ。
彼女はエクスデスに向き直り、やおら力ある言葉を紡ぐ。
――レナの掌に蒼白い光が生じる。
「……お父様の仇っ!!」
レナはエクスデスに向けてサンダラの電撃を放った。が。
「――えっ!?」
雷光が鉄格子に触れた瞬間、鉄格子全体が鈍い紫の光を帯びる。
電撃は弾き返され、術者――レナをめがけて襲いかかった！
刹那、ファリスが叫ぶ。
「二人とも伏せろ！」
バッツがレナに覆いかぶさり床に伏せる。

ファリスはブーツの底に仕込んでいたナイフを素早く抜き、勢いよく近づいてくる雷の塊に投げつけた。
避雷針が雷を誘導するがごとく、ナイフに総ての電撃が集中する。
ぱあっん!!
ナイフは粉砕し、炭化した残骸がぱらぱらと床にこぼれ落ちた。
三人が安堵する間もなくエクスデスが嘲る。
「残念だったな、〝白き睡蓮〟よ。その鉄格子には、内向きに魔法反射の呪文を施してある。ついでに言っておくが、三方の壁は、いかな強力な爆弾を以てしてでも崩れぬ。
――ギルガメッシュ!」
「はっ!」
バッツ達が目覚めたときには既に出入口に控えていた、赤を基調とする異国風の鎧で武装した巨漢が、主の呼び出しに応えてエクスデスの傍近くへやって来る。
「こやつらを見張れ。…頼りにしているぞ」
「かしこまりました!」
エクスデスはギルガメッシュの肩を軽く叩き、部屋から出ていこうとした。
出入口に差しかかったとき、エクスデスは、忘れていた、とでもいうように振り返り、牢の中の姉妹に目をやる。
「そうそう、タイクーンの双華よ。そなた達は私を父の仇と思っているようだが、よく思い出してみよ。それは大きな間違いではないのか? 私はそなた達の父を殺めてはいない。逆恨みで仇呼ばわりされるのは、あまり気持ちのよいものではないな」
父の最期を思い浮かべ、はっとするレナ。
冷たい目をしてエクスデスを見据えるファリス。
そんな姉妹を横目に、エクスデスは高笑いしながら退室した。

意気消沈したレナが、バッツとファリスに謝った。
「…ごめんなさい。先走って……」
バッツは掌で彼女の頭を軽く叩く。
ファリスは親が子の過ちを許すような顔をする。
「敵の手中にあるときは、充分過ぎるくらいに気をつけろ。
……でも、奴の言ったことも、表面だけ見ればその通りだな」
「姉様!? 何を…」
非難めいたレナの叫び。
だがファリスはそれを制して言った。
「ガラフがこっちの世界に帰った後、色々と考えていたんだ。
……エクスデスは直接父様を殺してはいない。それは事実だ。
だが、俺達の世界のクリスタルを破壊し、己の魔力で操った土のクリスタルをそのままにしてツェルラーへ舞い戻った奴は、父様に取り憑いていた間に知ったその気性――王者として神官としての誇り高さを見越し、父様が自らクリスタルを鎮めよう

とすることを予想していた。それが、父様の命と引き換えになることも」

床に拳を叩きつけ、レナは怒りとも哀しみともつかぬ口調で、

「だとすれば姉様！　私や姉様が奴を父様の仇と思うことが、逆恨みになるとはいえないわ。……エクスデスは半ば計画的にお父様を殺したのよ……！」

語気が強まり、彼女は興奮のあまりに双眸から涙をこぼした。

あやすように、ファリスが妹を抱き締める。

バッツは、ふと思いついた。

「それじゃあ、エクスデスの奴がおまえ達二人を煽りたてて、奴自身を憎むように仕立てた…ってことにならないか？　魔物の力の源は、憎しみや哀しみなんかの負の感情だと聞いたことがある。奴はまさか、それを求めていたんじゃ……？」

「……にしては甘すぎる。本気で負の感情を求めているなら、俺達の世界を、復興させる気力が起こらないほどの壊滅状態に追い込むはずだ。……俺がエクスデスなら、そうするね。

奴の目的は一体何なのか、俺達の『利用価値』とは何なのか、……どうして、父様に取り憑いたのか……、――憶測ならいくらでもできるが、正確に摑むには情報が足りない」

確かに、次元移動してすぐに捕まってしまったのだから、情報収集どころの話ではない。

「なあレナ、ファリス。

『利用価値』で思ったんだけど、エクスデスは俺達に何かをさせたがっている気がしないか？」

レナが姉の胸から顔を上げ、ファリスもバッツを見て頷く。

バッツは言葉を続ける。

「平和に昼寝でもしながら暮らしたい人間にとっちゃ、ひたすら迷惑な話だけど、奴の言葉を深読みすれば、俺達がいなければできない事をエクスデスはやろうとしている。……考えすぎかな？」

レナが瞼を拭った。

「可能性のひとつとして、心に留めておいてもいいと思うわ」

――と。

「随分と物騒な剣をもってるなぁ。誰の得物だ？」

牢の横の見張り場、簡素な机の上に置かれたバッツ達の剣を品定めしていたギルガメッシュが、一本の剣を持って牢の中をのぞき込んだ。

頭を覆った奇妙な兜が、目を引いた。

芝居で使う仮面のように髭と化粧を施し、顔面に沿うような凹凸がある、目と口の所だけをくりぬき口部分には義歯を入れた兜。

ギルガメッシュの持ってきた剣は、血色の針が無数に封じられている針水晶を鍔に埋め込んだ剣――ファリスの死神の剣。

しかも、抜き身である。

「――!?」

ファリスが、自分の目を疑った。

「……なぜ……ルード・ラ・シェルウを持って無事でいられる……!?」
持ち主はおまえか、とギルガメッシュが妙に楽しそうに笑う。
「へぇ…ルード・ラ・シェルウっていうのか。
この剣、いや、この針水晶か。どーも変わった力が込められていてよ。力の感じからして、並の人間が手にしたら……そうだな、即死するか辻斬りにでも走るかしそーなシロモノだ。
ま、当年とって二五二歳の俺様には、志気を高めるのに具合がいいけどよ。なんつーか、こう、ビシビシと石から力が伝わってくるぜ。ビシビシっとな。
――ファリス、っていったか。おまえ、極上に綺麗な顔して、とんでもなくやっかいな武器を平気で扱えるみてぇだな。こんな女を放し飼いにしてちゃあ、この先エクスデス様も手こずるだろーよ」
よく喋るギルガメッシュの胴間声を聞きながら、ファリスが次第に冷然となっていく。
彼女はむき出しの剃刀にも似た眼差しで彼を見て、一言。
「…最高の讃辞だな」
絶対零度よりなお冷たい声。
しかしギルガメッシュは泰然と、
「別嬪さんの怒った顔は流石におっかねーや。…ま、そん中で大人しくしてな。綺麗な鳥は籠ん中で鑑賞される運命だからよ。
おっ、いいこと思いついた。俺んとこに嫁に来いや。百年や二百年は余裕で、その若い姿のまんまでいられるぞ」
「失せな。口数の多い男は趣味じゃないんでね」
「……おおーい、即答かい。少しは考えるフリくらいしろよ。可愛げねぇなあ」
と、肩をすくめるギルガメッシュ。残念そうな口調とは裏腹に、スキップに近い足取りで、剣を軽く振りながら見張り場へ戻ってどっかりと椅子に腰を降ろした。
「…魔物の花嫁、ね。それはそれで面白いな」
鳥肌が立つほどに冷淡に呟いたファリスの全身から、殺気が溢れ出すのを感じる。
……まずい……こいつ、キレそうだ。
バッツは彼女の肩に手を置き囁いた。
「ファリス、落ち着け。……機会を待とう。おまえとレナだけは、必ずここから出してやるからな…!」
真剣に言ったバッツに、ファリスは彼の紺青の瞳をまじまじと見つめた。
そして、ぷっと吹き出す。
「…なに…笑ってんだよ……?」
この、感情の急激な変化は一体……?
「……いや、いくら父様の遺言とはいえ、俺がおまえみたいな小僧にそんなこと言われるとは思ってなかったからさ。つい…」
自分で自分を抱き締めながら、ファリスは肩を振るわせる。
「――――――。

……お〜ま〜え〜な〜ぁ！　いつまで小僧扱いする気だ！俺だって一応男だぞ。女の一人や二人守れなくて、どーすんだよ!!」

延々と笑い続けていたファリスは、

「しゃーねーな。おまえの〝男の面子〟を立てて、守られてやるよ。

――ただし、おまえ一人の手に負える範囲だったらな」

と、指でバッツの鼻先を弾いて、余裕の笑みを浮かべる。

バッツはかなり釈然としないものを覚えた。

「おまえ、基本的に俺を馬鹿にしてるだろ」

「いーえ、頼りにしてますわ、バッツ様♡」

「……馬鹿にしてねー奴は、そーゆー口調でものを言わんぞ」

盛大な溜息が、ついて出た。

……彼女は、いや、彼女達は知らない。バッツの心の奥底に渦巻く思いを。

悔しかった――自分に対して。

『クリスタルに選ばれた戦士』と、『クリスタルの心が宿る者』と言われながら、結果的に、自分は一体何をしていたのだろうか？

……何も、できなかった。

自分の生まれ育った世界の平穏は乱れ、そう遠くない未来に、いつかレナが言っていた『人の住めない世界』になるだろう。

ガラフは俺達の仲間だと、共に戦うのだと、意気込んで異世界へ渡ってはきたけれど、早々に囚われの身となり、ガラフの足を引っ張る羽目に陥ってしまった。――まるで無様の見本だ。

……畜生……！

バッツは拳を握り固める。

強い力が、欲しかった。

こんな牢などたやすく破り抜け、あの暗黒魔道士を討ち倒す力を。

それは、思い、というより――欲望。

古来、数えきれない者がより強い力を求め、その果てに自滅していった例は、幼い頃から父に教わっていた。だけど。

危険だと知りつつ、強き力への渇望は止まらない。

世界を守るため、などと気取るつもりは毛頭ない。

自分が今、守りたいのはただ二人。

――彼女達を守りたくて、自分は生まれてきたのだから。

「…!?」

俺…いま何を……!?

頭の中で、意思に関せず繰り返される言葉。

――彼女達ヲ守ルタメニ　俺ハ　生マレテキタ――

自分の…〝バッツ・クラウザー〟としての顕在意識ではなく、潜在意識、いや、魂に刻み込まれたような、言葉。

閉じ込められていた使命感――というべきだろうか、それの切れ端が、心の表層に浮かび上がる。

体の奥深くで、風が巻き起こったような気がした。

どこか懐かしい、感覚。
……俺は一体どうしちまったんだ!?
「…どうしたの、バッツ？」
姉妹の不可思議そうな視線を感じて、バッツは我に返る。

彼女ヲ　守ラナクテハ――

†

再び、ビッグブリッジ。
ガラフの命で撤退していたバル軍。
その最後尾で後退を続けていたガラフは、やりきれない思いを胸に抱いていた。
囚われの身となった仲間。
わしは、彼らを見捨てるのか？
覚えるのは、憤り。
……わしは……やはり……。
ガラフは一度瞼を強く閉じ、カッと見開いた。
茶色の瞳には、決意がみなぎっている。
ひそひ草を取り出し、語りかけた。
「ゼザ、わしじゃ」
やや遅れて、ゼザの声が草から聞こえてきた。
〔どうした、ガラフ？〕
「アストネアで共に戦った仲間が、エクスデスに捕えられた。わしはこれから救出にゆく」
〔……人質があったのでは攻撃は無理、というわけか〕
「そうだ」
……それに、それ以前の問題でもあった。
仲間。戦友。血脈を超えた、愛しき者達――。
「ゼザ、ひそひ草はクルルに預けておく。バル一の魔道士とはいえ、まだまだ幼い。わしが仲間を連れて戻るまで、クルルが伝える状況から最もよい策を与えてやってくれ」
〔解かった。……無事に、戻って来い〕
「もとより」
交信を終えたガラフは、クルルにひそひ草を渡す。
「クルル、ルィスタを借りるぞ」
クルルは心得たように小さく笑い、
「おじいちゃん、やっぱり乗り込むんだね」
飛竜ルィスタの鼻先を撫でた。
「ルィスタ、ちゃんとおじいちゃんの言うこと聞くんだよ」
ヒュルウキュル！
翼を広げた飛竜に飛び乗ったガラフは、振り返ってクルルに、
「軍はここで待機させろ。どんなに小さな事でも、何かしらの変化が起きたら、すぐにゼザと連絡を取るんじゃ。よいな!?」
「わかった。気をつけてね!!」
ルィスタが大気の流れに乗って空の高みに浮かび、東へ――
エクスデスの牙城へと、並ならぬ速さで飛んでゆく。

†

バッツ達は――呆れていた。
牢の見張りを任されているはずのギルガメッシュが、あろうことか机に足を投げだして眠っているのだ。
高らかに、鼾をかいて。
「……職務怠慢なヤツ……」
「いーのか、見張りがあれで？」
「エクスデス、人選を間違えたんじゃない？」
しかし、これはいい機会である。
鉄格子をよく見れば、上げ下げする造りになっていた。
棘つき……だけど、そんなことでこの好機を逃せるか！
バッツは鉄格子に手をかける。
そして、力強く握り締めた。
ぶつり、ぶつり――棘が、掌に食い込み激痛が走る。
流れ出た血が手の甲を伝い、床にしたたり落ちる。
「くっ…うううぅっ――――!!」
バッツは痛みを無視して鉄格子を持ち上げようと、全身の力を振り絞った。
レナが小さく叫ぶ。
「バッツ！　何をするのっ!!」
首から上だけ振り向いたバッツは、
「…言っただろ？　二人だけは、必ずここから出してやるって」
「でもっ!!」
今にも泣き出しそうなレナ。
バッツは無理矢理に笑顔を作る。
「心配するな。こんなの、たいしたモンじゃねぇよ……！」
とはいえ鉄格子は予想以上に重く、バッツ一人の力だけではビクともしない。
激しい痛みが脳天にまで達し、目が回ってくる。
と、ファリスがバッツの横に並び、鉄格子を握って、下から上へと力をかけた。
「…く…っ……！」
レナがまた小さな叫び声を上げる。
「――姉様!?」
幾筋もの赤が流れ出る、ファリスの掌。
それを横目に見たバッツの心は、強い衝撃に揺さぶられた。
「ファリス、下がれ！　俺ひとりで充分だ!!」
バッツには『女の身体に傷を負わせてはいけない』という、一種信念めいたものがあり、性格はどうあれ一応女であるところの彼女が、自ら傷を負うのは我慢ならなかった。
けれどファリスは鉄格子から手を離さない。
バッツをキッと見て一喝、
「なに格好つけてんだ、この非常時に！」
一瞬たじろぐバッツなど構わずに、その後に続けられた言葉

は。
「――たとえ俺は死んでも、レナだけは逃がす……!!」
バッツは思わず脱力しそうになった。
……こいつって……。
だがしかしファリスの加勢によって、鉄格子は床から離れ、人ひとりなんとか通れる隙間ができた。
「……今だ、レナ！　抜け出して、逃げろ！」
レナが首を横に振る。
「姉様達を置いてなんて、行けないわ！」
「ガラフ達と合流するんだ！　エクスデスの野郎が何を狙っているかまでは解からないが、今の時点で俺達に手を下すとは思えない。だから、……早く行け!!」
「……だけど、姉様もバッツも、そんなに血が……！」
「女が血でびびってんじゃねぇ！　おまえだって毎月血を流すだろう!?　…だから、見張りが眠りこけているうちに、ガラフと合流してこの城を一気に攻め落とすんだ！」
レナは逡巡しながらも、姉の言葉に従い鉄格子の下を潜り抜ける。
バッツとファリスが力尽きて、鉄格子から手を離した――それでもゆっくりと、音を立てぬように。
「……レナ…早く、行け……」
「姉様…」
レナは決心するように唇を噛み締め、しかし躊躇いは残るのか幾度も振り返りながら、出口へと走る。
――その瞬間、赤い影がレナを追うように動いた。
「外は怖〜い魔物だらけだぜ。お嬢ちゃん綺麗だから、あっという間に喰われちまうぞ」
バッツとファリスは目を瞠る。
レナも一瞬、自分の身に何が起こったのか判らなかった。
……あの巨体からはとても想像できぬほどの速さで、いつの間にやらギルガメッシュは、レナを肩に担ぎ上げていたのだ。
歴戦の強者である牢の中の二人でさえ、その動きを〝影〟としか捉えられなかった。
「離してっ！」
レナはもがいた。
「レナ！」
「っ!!」
手に負った傷をそのままに、ファリスが懐に隠し持っていた拳銃を取り出して、親指で撃鉄を起こし引鉄を一気に引き絞る。
が。
カンッ…
「ん？　な〜んか頭に当たったなぁ？」
ギルガメッシュの頭部に命中した弾丸は、兜に弾かれ、床に転がった。
ファリスは銃口から煙がのぼる拳銃を手にしたまま呆然と、
「……嘘だろ……鉄兜さえ、貫通…するヤツ、だぞ……――」

ギルガメッシュが実に嬉しそうに言った。
「この兜や鎧は特別製さ。何で出来てるかは企業秘密だぜ。……おっと、お嬢ちゃん。可愛いお口に黒魔法の呪文なんざ似合わねぇぞ？」
彼は常人では聞き取れぬほど小さな声で呪文を唱えていたレナに気づくや否や、彼女を床に降ろして、その口を大きな手で塞ぐ。
「〜〜〜っ！」
レナを牢へ戻すより、人質にとる方が得策だと考えたのだろう。
「ま、安心しな。お嬢ちゃんに手荒な真似はしないからよ」
驚きと焦りと傷の痛みに額が汗ばんだバッツとファリスを見て、ギルガメッシュは鼻で笑い、見張り場に戻る。
「……くそっ、なんて奴だ……！」

†

夕闇が、せまる頃——。
ルィスタを飛ばしに飛ばして、その周りを魔物の気配が漂う山に囲まれたエクスデスの城の上空まで来たガラフは、二階に相当する高さにあるテラスへ降りて剣を抜いた。
「…この城、いったい何階建てじゃ？　やたらに高いの。ルィスタ！　おまえはクルルの所に戻っていろ。ここはバケモノどもの総本山だ。空を飛ぶ者は必ず的になる」
人語を解する飛竜はひとつ鳴き、バル軍がいる西へ飛んでいった。
ガラフは剣の柄を握り直す。
……普通に考えれば、牢獄は地下にあるはず。
エクスデスの城にそんな常識が当てはまるか否かは不明だが、とりあえずガラフは地下へ向かって走り出した。
——バッツ、レナ、ファリス…！　頼む、無事でいてくれ！

†

膠着状態が続いていた。
レナはギルガメッシュに囚われたまま動けず、牢の中の二人も打って出る手はなかった。
バッツとファリスがこれといった動きを見せず、人質のレナも逃れるのは無理と諦めたのか大人しくしていたので、ギルガメッシュは見張り場でのんびりとしていた。
ファリスに手の傷を癒してもらったバッツは、掌と指の動きに支障はないか、握ったり開いたりしてみる。
……異常はなかった。むしろ以前より動きが滑らかになったような気がする。
バッツはちらりとファリスを見た。
レナよりも遅れて魔法を覚えたはずなのに、ファリスの施し

た回復魔法のほうが効きがいい。
野育ち――海育ちのほうが適切だろうか――ではあるが、やはりタイクーン第一王女、ユニシアの世の長姫という生まれは、彼女に大きな力を与えているのかもしれない。
彼女自身の意識が。あるいは遠く次元を隔てたアストネアが。
さて、とバッツは気を取り直して思考を巡らす。
……もう一度、鉄格子を持ち上げて、今度はファリスを外に出すか？
しかしバッツはかぶりを振る。
なにせ二人がかりでようやっと持ち上がった鉄格子。
仮にファリスが牢の外に出られたとしても、『実の妹』という人質を楯にしたギルガメッシュ相手に、彼女がどこまで対抗できるだろう？
それに、ギルガメッシュのあの動き……ただものではない。
身の軽さにおいては文句のつけようのないファリスを遙かに凌いでいる。
「……人間と魔物の違い、ってヤツか…」
「バッツ。さっきから何ブツブツほざいてんだ？」
ファリスが不機嫌そうに言う。
「あのなぁ、おまえもこの状態を切り抜ける方法を考えろ」
「俺が何も考えてないとでも思っているのか？」
間髪入れずに返答されて、バッツは言葉に詰まる。
「……本当のことを言えば、ルード・ラ・シェルウが頼りだったんだ」
「え？」
首を傾げたバッツに、
「あの剣の針水晶には、どうやら見る者の心を誘い寄せる力があるらしい。実際、過去に何度も、石に魅せられた奴がいたからな」
「…って、俺やレナやガラフは平気だったけど？」
「これも憶測でしかないが、クリスタルの力に護られているから、だと思う。
――ギルガメッシュの奴があの剣に興味を持って、手に取ることは予想していた。
知っての通り、普通なら鞘から抜いたその瞬間に、死ぬか発狂しているはずなんだ。…俺はそれを狙っていた。
だが…奴が言っていただろ、『志気を高めるのに具合がいい』と。
……俺はあの時、本気で驚いた。まさか俺以外に、あの剣を持って無事でいられる奴がいたなんて。――まさしく『人間と魔物の違い』だな」
息をついて、彼女は長い指で髪をかきあげる。
「なあファリス。ルード・ラ・シェルウを何の害なく持つには、いったい何が必要なんだ？　おまえ自身が魔物だっていうなら話は別だけど、誰よりも血筋ははっきりしてるし」
「死神さんに訊いてくれ。俺も知らん」

とぼけているわけではなく、ファリス自身も本当に知らないらしい。
「人間離れしたヤツ…。
……気になってたんだけど、最初に会ったとき、おまえ、俺の首にあの剣を突きつけただろ」
「不法侵入および船舶盗難未遂の罪は重い」
「違法行為で食ってた奴の言うことか？　……じゃなくて。
――剣が触れた所から、生まれてこのかた感じたことのない嫌な感覚が伝わってきたんだ。ルード・ラ・シェルウって、まさかとは思うんだけど…」
その時。
「誰だ、そこに居るのは。気配が消しきれてないぞ？」
ギルガメッシュが出入口に向かって誰何する。
「……なかなかに鋭い。いや、わしの腕が落ちたのかいな？
やれやれ…寄る年波にはかなわぬな」
右手に剣を携えた初老の男が、姿を見せた。
その声は…彼は。
「ガラフ！」
バッツとファリスが同時に彼の名を呼んだ。
ガラフはじろり、とギルガメッシュを見る。
その腕の中の、口を塞がれたままのレナ。
「娘を放せ。おまえは腕の立つ武人と見た。……恥ずかしいと思わぬのか？　女を人質に取ることを」
ギルガメッシュはレナを抱えたまま、ルード・ラ・シェルウを手にして、ガラフに近づく。
「生憎だが今はエクスデス様の親衛隊長だ。主に忠義を尽くすためなら、手段は選ばねぇ」
「主に忠義を尽くすため、か。その心がけは賞賛に値するな。
……だが、そちらがそのつもりならば…参る！」
ガラフが石畳の床を蹴った。
彼が剣を振り上げ、――ファリスが叫ぶ。
「ガラフ！　その剣とまともに刃を交えるな!!」
叫びに気を取られたのかガラフが一瞬、無防備になる。
その隙を見逃すギルガメッシュではなかった。
「せいやっ！」
ガラフめがけて振り下ろされる剣。
キイィンッ
反射的に彼は、剣でギルガメッシュの攻撃を受けとめていた。
が、剣から伝わる感覚に、顔をしかめて呻く。
――先程バッツが口にしかけた続きを、ガラフが引き継ぐこととなる。
「ぐっ…。何じゃ、この異様な〝気〟は!?　まるで精気が吸い取られるようじゃ…！」
ルード・ラ・シェルウの針水晶が、鈍く光ったのは気のせいだろうか。
ガラフはその剣身を弾きあげて、ギルガメッシュとの間合い

を広げた。
「…なるほど。〝死神の剣〟とは言い得て妙じゃ。生ある者の〝気〟を吸い上げる剣か…!!」
ぶるっとおぞけを振り払い剣を構え直すガラフに、ギルガメッシュが嘲笑した。
「じいさんよぉ。昔は〝暁の戦士〟と呼ばれてブイブイいわせてたそうだが、今じゃ随分と黄昏てんじゃねぇのか？
三十年前、このテの魔剣の使い手が、こっち側にだけどゴロゴロしてたって話だぜ。……じいさん、あんたそろそろ潮時じゃねぇのぉ？」
ガラフが、不敵にもニヤリと笑う。
「――おしゃべりな奴じゃな。……戦士は臨終の時まで戦士として生き続けるものじゃ。わしも一生現役でいるつもりじゃよ。……いま一度、いくぞ…っ！」
再びガラフは床を蹴る。
目線はルード・ラ・シェルウへ。
しかし、体は素早くギルガメッシュの懐へ入り込み、太い腕からレナを攫うように助け出す！
レナも心得たもので、すぐにガラフの邪魔にならない位置へ移動した。
ガラフは剣を両手で握り直して、渾身の力を込めて奴の腕に叩きつける。
刃は籠手を斬り裂くには至らなかった。けれど。
「くっ……！」
からん…
ギルガメッシュの手から、剣が離れて床に落ちた――レナの足元へ。
もちろん彼女は触れようとしない。
「姉様！」
「おうよ！」
剣を牢に向かって、力一杯蹴り飛ばす。
剣は鉄格子を抜け、牢の中のファリスの前に滑り込んだ。
「レナ、上手い！」
獄中のファリスがルード・ラ・シェルウを手にしたところで何ができるわけでもないが、少なくとも、この剣によるガラフへの負担はなくすことができる。
「それが淑やかそーな嬢ちゃんのやることかーっ!?」
俺の夢を壊さないでくれ、と、なぜか嘆くギルガメッシュ。
彼女にしては至極珍しく、冷笑するレナ。
「呆れたわ。戦士である私に、どんな夢を見ていたというの？」
言って彼女は走り、牢の横に取り付けられた、鉄格子の開閉レバーに手をかける。
――が。
「な…なんて重いの…！　私一人の力じゃ無理みたい…!!」
レナは弾みをつけてレバーに体重をかけたが、鉄格子は開かない。

一方、ガラフは、
「……どーも調子が狂うんじゃが……」
などと呟きつつも、ギルガメッシュの鎧の継目を狙って攻撃していた。
「おうわっ、よっ、ほっ、っと」
ギルガメッシュは巧みにそれをかわしながら、左手で背中に挿していた槍を引き抜き、大きく跳びすさる。
……簡素だが、あなどれない槍だ。
木製の柄の穂先にアンゴンのようなかかり矢尻をつけた槍。刺されたら、容易には引き抜けない。
――どうやらもう一度、真剣に対峙する時が来たようだ。
ガラフとギルガメッシュが武器を構えて睨み合う。
――先に動いたのは、ギルガメッシュだった。
「じいさん、今度はこっちからいくぜ。…おりゃっ！」
ギルガメッシュは槍をくるりと軽く一回転させると、ガラフの喉元を狙った。しかし。
ガラフは避けようともせずに槍が近づくのを待ち、剣を閃かせて槍の柄を叩き切った。
「の…のわあああー！　俺の槍がああああー！」
……少し考えれば（いや、考えなくても）当然の結果である。柄が木で作られた槍と、鋼の刃の剣。どちらの強度が勝るかなど、三歳の幼児にだって判る。
「く、くそっ！　きょ、今日のところは、これくらいにしといてやる！　覚えときな！」
ぺっ！　つきなみな捨て台詞と共に唾を吐き捨て、ギルガメッシュは身を翻し逃げ出した。
……ガラフは、後を追う気にさえならなかった。
剣身を肩に担いで、
「何か策があるのかと思いきや、あの槍で馬鹿正直にまっすぐ攻めてくるとは……なんというマヌケな奴じゃ…」
レナはレバーを掴んだまま無言絶句、牢の中の二人は揃って頭を押さえていた。
「…あ、あんなアホにひっかきまわされてたのか、俺達……」
「取り柄は素早さと巨体だけか？　エクスデスの野郎、完璧に人選を間違えてるぞ」
「腕は立つよーに見えたけど、頭の中身はゴブリン並…」
「ゴブリンに失礼じゃねーか？」
「……ファリス、おまえそれ、とどめ刺してる……」
――とにかく、である。
ガラフはレナと鉄格子のレバーを下げて、バッツとファリスを解放した。
「姉様！　バッツ！」
妹と抱き合って互いの無事を喜ぶファリスが、ガラフに礼を述べた。
「ありがとう、ガラフ」
かっかっかっ…と、いつものガラフの豪快な笑い声。

「なんのなんの。……二人とも、相も変わらず仲がよいのー」
バッツは自責の念も露な面持ちで、
「ガラフ…すまない。俺達……」
その続きを察したガラフは、彼の背を叩いた。
「話は後じゃ。…ほれ、さっさと武器を取れ。急いで脱出するぞい！」
既にルード・ラ・シェルウを手にしていたファリスはともかく、バッツとレナが見張り場へ自分の剣を取りに行く。
――ファリスが、心配そうな眼差しをガラフに向けていた。
「ん？　どうしたんじゃ、ファリス？」
「ガラフ、体の具合はどうだ？」
「は？」
「この剣と刃を交ぜただろう？　……あんたの言った通り、こいつは生ける者の〝気〟を奪う剣だ。――もっと早くに、話しておくべきだった……」
ガラフは手をぱたぱた振る。
「終わり良ければ総て良し――っと、まだ終わっとらんが……。まあ、わしはこうしてピンシャンしとるし、そう案じるな」
「無理、してはいないな？」
「そのくらい、おまえさんなら解かるじゃろうに。
……ほれ、そんな暗い顔をしていては、折角の美人が台無しじゃ。もっと笑顔じゃ笑顔。『笑う角には福来たる』っとな！」
ガラフの無器用なウインク。
ファリスは一瞬目を丸くして、
「口まですぼめるなよ、ガラフ！　『笑う』のと『笑える』は、かなりの違いがあるぜ？」
こぼれるように、彼女はくすくす笑った。
「それでも笑顔になるには変わらんじゃろ」
よしよし、と頷くガラフ。
「…さ、みんな準備はよいな。では――行くぞい！」

†

「逃げられた？」
城の最上階。
「そうか、逃げたか……」
報告を受けた彼は、他意なくその事実を口に乗せる。
「申し訳ございません！」
それを責めと感じたか、ギルガメッシュは深々と頭を垂れた。
エクスデスはさして意に介した様子もなく、兜の奥で薄笑いを浮かべる。
「そのくらいのことをしてくれねば、つまらぬと思っていた。何せ相手は、アストネアのクリスタルに選ばれた戦士だからな。
……まあよい。
ギルガメッシュ。本来ならば、そなたにこの失態の責を取らせるところだが、そなたの腕は捨てるに惜しい。

――任務を与える。ビッグブリッジへ行き、奴らをかき回してやれ。だが、あの四人だけは決して殺すな」
「はっ！」
「私は術の最後の仕上げに入る。頃合を見計らって城へ戻れ。よいな」
「かしこまりました！」
ギルガメッシュが下がり、部屋にひとりきりとなったエクスデス。
「……鳥は籠から逃げたがるもの。羽根を切らずにおいた鳥なら尚のこと。…くくくっ…面白い遊戯になりそうだ。
――ガラフ達よ、私を失望させるなよ」
床に描いた魔方陣の中央に立ち、この世の誰もが聞いたことのない言葉を紡ぐ。

†

城内を監視する魔物達の目をかいくぐり、牙城の外へ出ると、ガラフの案内で西へ向かった。
「ねえガラフ。あの、遠くに見える長い橋は何？　大きさも長さも、……ちょっと桁外れみたいだけど」
「あれはビッグブリッジ。わしが生まれる、ず～～っと前からあった、とんでもなく巨大で長い橋じゃ。端から端まで渡り切るのに、……そうじゃな……男の足で十日はかかるじゃろう」
誰が何のために造ったのか、詳しく訊いてみたい気がする。
「……エクスデスが復活して以来、魔物の巣窟と化してしまったんじゃがの……。ちなみに今、あの橋には軍隊が待機しておる。彼らと合流するぞ」

背にした東の空が萌えている。
まるまる二日間、走り続けてやっと、ビッグブリッジ東側の大扉にたどり着いた。
大扉――その名の通り、橋の規模に合わせて作られたのか、大型の馬車が三台は余裕で横並びに走れる幅と、三階建ての民家と同じくらいの高さがあった。
「こんなにでかい扉、……どうやって開けるんだ……？」
「心配は無用。見た目は石で造られているようじゃが、石に似た、何か他の軽い物質で出来ておる。…ま、押してみい」
言われるままに両開きの扉を押してみる。
「…嘘だろ…」
手ごたえは、呆気に取られるほど軽かった。
宿屋の木の扉を開くような感覚で大扉を開けると、
「――だあああああー!!　な、なんでおまえがここにいるんだ!?」
バッツは思わず数歩後ろに飛びすさった。
部屋のようになっていたそこにはなんと、ギルガメッシュが仁王立ちしていたのだ。

「はっはっはっはっ！　この扉の裏でずっと待っていたぞ！
来なかったらどうしようかと不安になっていたところだ！」
「……。」
わざとなのか天然なのか、膝の力が抜けるようなことを言う。
四人揃って呆れたのも無理はない。
「……ずっと待っていた…って、いつからここにいたのよ…？」
「んー、かれこれ五時間になるかなぁ。空を飛べるヤツに連れてきてもらってよ。先回り先回り♡」
「気色悪いから語尾にハートマークつけるな…」
ギルガメッシュが指を立ててチッチッと振る。
「これからの時代を生きていくには、愛らしさが必要だぜ」
「……おまえの場合、ファリスの女言葉並に気持ち悪いぞ」
言い終えた直後、ファリスが表情を変えずに問答無用でバッツの後頭部を殴りつけた。
目の前に星がちらつく。
手加減なしの鉄拳に文句のひとつも言いたかったが、流石に今のは（心底思っていても）失言だったとバッツは堪えた。
――場違いにも、既に漫才と化したやりとりの中、ガラフはひとり、（妙に寂しくなりながら）真面目に言った。
「…ギルガメッシュとやら。わしらはここを通りたいのじゃ。道をあけてくれんかの」
「悪いが、そうはいかねぇ。どうしてもっていうなら、俺様を倒してからにするんだな」
ガラフが鼻で笑う。
「城で間抜けな醜態さらして敵前逃亡したおぬしが、何を偉そうに。……よかろう。おぬしの言う通り、実力行使させてもらうぞ」

シュッ

ガラフの剣を抜く音が、戦闘開始の合図となった。
バッツ達は瞬時に気持ちを切り替える。
松明を床に放り、ギルガメッシュを囲むように散らばって、それぞれの武器を構えた。
奴も今度は、頑丈そうな鉄製の槍を手にしていた。
「はっ！」
まずは、ガラフが気合いを発して駆け出し、剣を閃かせる。

ガシッ！

ギルガメッシュは鉄槍でガラフの攻撃を受け止めた。
すかさずバッツが兜と鎧の間に剣を突き出す。
が、ギルガメッシュが素早く鉄槍をくるりと回転させて、バッツの剣を弾いた。
直後、奴の後ろへ回り込んでいたファリスが、頭部をめがけて剣を薙ぐ。
ギルガメッシュは体勢を低くしてこれをかわすが、ファリスは手首を返して頭頂部に剣を叩き付けた。
だが、兜には刃の跡が一筋残っただけで、割ることはおろかひびを入れることすら叶わない。

「普通の兜なら、とっくに割れてるぜ」
舌打ちしてファリスは、ギルガメッシュとの間合いを広げた。
「ファイラ！」
密かに呪文を唱えていたレナが、炎の塊を投げつける。
「おうわっ!? あぁちちぃぃー!!」
全身を炎に包まれ熱さにもがくギルガメッシュに向けて、
「そんなに熱いなら、こちらを差し上げるわ。…ブリザラ！」
レナはさらに冷気の塊を放った。
「あ、ありがてぇ、これで火が消える……って冷てぇぞぉぉ!!」
「その鎧がどんな素材で出来ているかは知らないけれど、これで少しは脆くなったはず…！」
「――！」
レナの二段攻撃の意味が解かった――温度差の利用だ。
バッツとガラフが疾った。
バッツが前から、ガラフは後ろから、ギルガメッシュの胴に剣を叩き付ける。
ピシ…と、鎧に亀裂が入った。
「げえっ!?」
ギルガメッシュは後ろに跳ぶ。
「俺が悪かった……。四人で来られちゃ、手も足も出ないぜ」
負けを認める台詞を吐いた直後、やおら呪文を唱え出した。
「！ おぬし、魔法をも使えるのか!?」
レナが大急ぎで魔法封じの呪文を紡ぐ。が。
ギルガメッシュの呪文詠唱は速かった。
加速呪文、物理攻撃防御呪文、魔法防御呪文。
瞬く間に守りを固め、
「……ってのは、嘘だけどな!! せいやっ！」
タンっと跳び上がる。
ギルガメッシュの繰り出す蹴りが、バッツの顔面を直撃した。
「ぐっ…！」
「バッツ！」
ただでさえ動きの速いギルガメッシュが、ヘイストの魔法により素早さが増したため、バッツは奴の動きを全く見切れなかった。
バッツの顔にはくっきりと足形がつき、鼻から血が流れる。
「ぎゃははは。バッツ、おまえの美青年ヅラ、なかなかユカイになったじゃねぇか！」
指さして笑うギルガメッシュ。とても、二五二年の時を生きている者の言動とは思えない。まるで十にも満たない少年だ。
顔を手で覆いながら、バッツは低く唸った。
「…野郎……!!」
――逆上、した。
血を拭うことすらせず駆け、ギルガメッシュの顔面めがけて剣を振り上げた。
バッツの気迫に驚いたのか、ギルガメッシュは一瞬固まる。
「おらぁっ!!」

カン…っ

兜の真ん中にひびが入り、そこからぱっくりと割れた。

短く刈り込まれた、髪に該当する黒い毛。浅黒い肌に映える赤い瞳。

素顔のギルガメッシュは、人間で例えれば壮年の、美丈夫とはいえないが見苦しくもない、精悍な顔立ちをしていた。

バッツは容赦なくその顔に太刀傷をつける。

「うっ！」

ギルガメッシュの顔に一筋の青――魔物の血の色――が走った。

「…人を馬鹿にすんのも、大概にしろよな!!」

剣を閃かせ、もう一筋。

顔面に斜め十字の傷をつけられたギルガメッシュは、

「き…急用を思い出したぜ!! 必ず戻って来るからな！」

焦ったように言い置いて、橋の外へ逃げ出した。

「待て、ギルガメッシュ！」

追いかけようとしたバッツをガラフが羽交い締めにする。

「離せ、ガラフ！」

「バッツ、深追いするでない！ 顔に足形つけられた上に笑われて腹が立つのは解かるが、今は軍と合流することが先じゃ！」

正当な事を言われ、けれど悔しさのあまりに呻いて、抵抗するのをやめた。

さっとレナが傍に来て、バッツの顔の痣を治し、汚れを拭いてくれる。

「……気持ちは解かるけど、少し冷静になったほうがいいわ。相手は、言動は間が抜けているけれど、かなり腕が立つみたいだから。

……鼻血、止まった？」

「ん…ああ。……すまない、レナ」

「私は構わないのだけどね。……姉様とガラフが呆れてるわよ」

ファリスは腕を組み、小さな、だがはっきりと聞こえる声で、

「お子様」

ガラフは「仕方のない奴じゃ」と肩をすくめて松明を取り上げる。

「〜〜……」

少し恥ずかしくなったバッツは、彼らに背を向けてさくさく歩き、奥の扉を開いた。

遙か頭上に広がる夜明けの空は、地上の喧騒など全く知らずに紫から東雲色の鮮やかなグラデーションを描く。

――橋の先のほうで剣戟の響きが聞こえた。

おそらくあれが、ガラフの言っていた軍隊なのだろう。

「くそっ、また魔物どもが現われたか。急いで加勢するぞ！」

走り出したガラフに続き、三人も軍隊に向かった。

「おじいちゃーん！」

遠くから、少女の呼び声。

「急いで戻って！ エクスデスが、バリアを完成させたみたい

なの!!　早く…早く戻って!!」
切羽詰まった声が宙に消えるや否や。
エクスデスの城を囲むように立っていた四本の塔から、オレンジ色の不気味な光が立ち上る。
「いかん、逃げるんじゃ、クルルっ!!」
光は四方八方に広がり、バッツ達のいる地点までにも達する。
「…っあああ――――!!」
光に飲み込まれた彼らの全身に、電撃にも似た衝撃が襲いかかった！
視界が暗転する。
――それから先のことを、バッツは覚えていない――。

†

ギルガメッシュは自分の体格よりさらに巨大な大鷲の足に摑まって、空高くから橋を瞰下していた。
「ありゃー。あいつらバリアに吹っ飛ばされちまった。殺すなって言っといて、……タイミング悪過ぎるぜ、エクスデス様。下手なところに飛ばされたら、御陀仏御臨終モンだぜー？」
顔に触れるギルガメッシュ。
「……俺としても、なかなかお目にかかれない手練に出会えたってのによ」

バッツに斬りつけられた傷が、痛む。
痛みを悦楽と感じる性質ではないが、彼は喜びの笑みを浮かべた。
「二五二年間で俺様の顔に傷をつけたのは、バッツ、おまえが初めてだぜ。
……生きてりゃいーんだがな……」

†

バリアの光は次第に収縮して、牙城全体とその周辺を包み込むに留まった。
クルルが目を開いたとき、彼女の百ナームほど前まで来ていたはずの祖父とその仲間の姿は、……見当たらなかった。
「おじい…ちゃん……？」
隙をついて襲ってきた魔物に攻撃魔法を見舞いながら、辺りを見回す。
だが、人と呼ばれる者は、兵士の他には誰もいない。
「……嘘…でしょ……。――おじいちゃん!!」
〔どうした、クルル〕
懐に入れておいたひそひ草から、ゼザの呼びかけ。
クルルはひそひ草を取り出す。
「ゼザのおじいちゃん、大変なの！　おじいちゃん達が、バリアに弾かれたのか――いなくなっちゃった…!!」

〔何!?〕
「どうしよう……おじいちゃん達、どこにいっちゃたんだろう……!?」
ひそひ草の向こうで、ゼザが言葉を失った――。